



2001年度岩見沢分校卒業論文等概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9331

2001年度 岩見沢校学士論文等概要

〈学校教員養成課程〉

「学校」教育系

教育学 今年度は以下の14本の卒論が提出された。

「ボランティア—その教育への可能性—」「学校飼育動物の教育力に関する研究」
「これからの学校と地域社会—子どもが生き生きと生活できるために学校・地域社会ができること」(教育学第一研究室)。「『総合的な学習の時間』と初期社会科—北海道社会科教育連盟の軌跡から—」「学級崩壊—子どもの荒れの文責・考察—」「中高一貫教育の選択的導入」「小学校指導要録の歩みと通知表における—考察」(第二研究室)。「ミャンマーの初等教育英語教師養成研究—教育カレッジの教科書分析を中心に—」「生活綴り方による生活指導—『岩見沢作文の会』の3人の教師たちの実践分析を通して—」(第三研究室)。「乳児期における母子関係の形成に関する発達の研究」「感情の共有における3つの位相—自己肯定感を高めるために—」「高等教育機関における聴覚障害学生のための支援体制に関する研究—授業実践を対象としたバリアフリーの試みに対する分析を通して—」「入院している子どもたちの生き生きとした生活を支えていくには—ある院内学級における取り組みを通して—」「すべての子の個別のニーズに添う教育の創造—星瑛国際高等学校の実践から—」(第四研究室)。

教育心理

以下8編の論文が提出された。「障害児をもつ母親が抱える子どもの育児に対する思いの変遷」「情動喚起場面におけるノンバーバル行動の違い」「読書感想文指導法の検討」「インターネット・ツールを利用した集団討議の—考察—ブレインストーミング法の応用」「モラルジレンマ資料を用いたふりかえりのある道德授業」「図形記号解読を用いた社会科授業づくり」「社会科教育における概念地図法の有用性」「バウムテスト—定量的評価の研究」。いずれも実証的な研究である。意欲的な研究も多かった。

総合教育

本年度は以下の7編が提出された。「『明石プラン』の単元構成論—木村孫吉と清水一郎の単元構成論を通して—」「米国におけるLanguage Artsの理論と実践について—方法的観点を中心に—」「小学校低学年社会科の社会認識教育をめぐる教育実践の分析と考察—社会科と生活科の継続と断絶について—」(以上・第1研究室)。「学校・教師はどのように地域とかかわるべきか—稚咲内小学校を例に—」「AD/HD研究の現状と課題—教師・学校はいかにして関わるべきか—」「上田薫の問題解決学習論」(以上・第2研究室)。

「言語」教育系

国語

古典文学2、近代文学1、現代文学3、国語学5、国語教育1の計12編が提出された。そのうち①『古事記』『黄泉国』論、②『助動詞における相互論』、③『平家物語』—義仲観比較論、④『萬葉集における色彩語彙論』、⑤『言葉のリズムに着目した「楽しい授業」考』の5編が特に優れている。①は緻密な古事記本文の読み

取りを、黄泉国にあらたな視点を与える。②は形態、意味、構文の三つの観点から助動詞の承接の体系化を図る。③は「覚一本平家物語」と「源平盛衰記」との文体・表現の比較を通して、その特徴を明らかにする。④は万葉集の赤・白・黒・青を詠み込まれた歌を通して、どのように色彩を用いているのかを追究する。⑤は言葉のリズムを国語の授業の中で、どのように構築するのか理論と実践の両面から考察する。

他の論文も努力しているが、論の構成・分析・論証などに惜しまれる面がある。

外国語 本年度は15編の論文が提出された。内訳は、英米文学に関するものは7編で、研究対象作家はカート・ヴォネガット、トルーマン・カポーティ、スコット・フィッツジェラルド、ジェイン・オースティン、アーネスト・ヘミングウェイ、ティム・オブライエン、アリス・ウォーカーであった。英語教育に関するものは4編で、英語の読解力および聴解力についてのものであった。そのほかには、聖書、魔女、ヘンリー・フォードの反ユダヤ運動、小説『オペラ座の怪人』のミュージカル化についての論文であった。

全般に努力の跡が認められる論文であった。

「社会」教育系

歴史 本年度は、日本史分野3編、外国史分野4編の計7編の学士論文が提出された。日本史分野では「二・三世紀の倭人社会—政治・社会の中心としての邪馬台国を考える—」、「田沼政権下における蝦夷地政策の真相」、「六大巡幸と北海道」がそれぞれあり、外国史分野では「書物の歴史—中国秦における焚書の考察—」、「大西洋奴隷貿易—近代奴隷制について—」、「ハプスブルク帝国とアウスグライヒ」、「東西ドイツの統合と外国人問題」がそれぞれであった。

いずれも実証性に富んだ説得的な内容であったが、例年同様、自らの興味・関心を日本史分野では史・資料に即して深めていこうとする姿勢が、外国史分野では理論的手法をもって深めていこうとする姿勢が、それぞれ目立ったように感じられた。提出者の進路は様々であるが、論文作成の過程で得られた視点や手法を、何らかの形で財産としていって頂きたいと、切に希うものである。

法政 今年は5編の卒論が完成をみた。「男女別コース制と公序良俗に関する一考察」は、雇用機会均等法以前の昭和40年代に採用された女性労働者たちが近年、立て続けに昇格差別・賃金差別訴訟を提起していることに関連する問題を取り上げ、労働法の専門家が頭を悩ませている公序論に挑戦した。やや突っ走った感があるものの、自分でよく考え、意見を論理的に構成した成果は高く評価したい。「個人情報保護に向けて—個人情報保護に関する法律案の考察」は、まだ法制化が実現していない法案段階の個人情報保護法について取り上げたものであるが、これもよく検討を加えたと思う。「キャンパスセクシュアル・ハラスメントにおける大学の責任についての一考察」は、職場で問題とされているセクハラとはまた違った、大学におけるセクハラの問題点を指摘し、私立大学ならば通常大学が負う責任を、国立大学では国が負うことになる点に着目した議論を展開した。残り2名は、政治学の先生に指導を受けながら政治学の論文を執筆した。「政党の戦略的意思決定と有権者の態度変容についての考察」は、われわれ有権者の政治に対する意識の変化が、90年代

の政界再編に及ぼした影響を研究したものであり、仮定と調査、研究、結論がしっかり構成された好論文となった。「官僚優位論VS政党優位論」は、外務省と元外務大臣をめぐるやり取りを彷彿させてくれるような論文で、非常におもしろいものとなっている。

社 経 今年度は、変化する現代の若者像と生命倫理の社会的諸問題を主題とする2編が編まれた。前者は、先行研究にみる「縁辺化・周辺化」「社会力」「トライアングル型成長構造」「社会的理性」などの概念を軸に、近年における若者の変貌のイメージを具象化しようとしたものであるが、関連領域を含めて広い視野での考察を試みたものであり、資料的にも価値がある。後者は、出生前診断—選択的人工妊娠中絶を中心にいわゆる生命倫理的な課題に回答しようとしたものであるが、社会的ならびに法律的な問題連関の丹念な収集と丁寧な検討をふまえたその考察は説得力をもっている。力作である。

哲 倫 全体で8編。時代を反映してなのか、そのうち2編は生命倫理に関するもの。事柄上医学の分野に踏み込まざるを得ず、哲学や倫理学からの独自のアプローチの仕方に苦慮した様である。残り6編のうち3編は西洋哲学関連（サルトル論、ギリシヤ哲学、プラグマティズム）、残りがユダヤ教と日本の神話を扱ったものである。これらのテーマは従来からよく取り上げられて来た。いわば古典的なものである。卒論は教員養成課程の学生として将来教師になった時に資する様な、自分のものの考え方をしっかりと培う様なものであって欲しいとの思いで指導して来ているところである。卒論はその出来、不出来というよりも、それへの取り組み方の真摯さが重要であり、そこにおのずとそれぞれの学生の勉学に対する姿勢が投映されていた様に思われる。

社会科教育 本年度の提出論文は4件である。「バチェラー八重子の研究」は、日記・手記と歌の分析および聞き取りにより、アイヌとして生きた八重子の信仰や葛藤を明らかにした力作である。「キャベツの教材価値と可能性」は、北海道のキャベツ主要生産地の現地調査を行って栽培から流通の特色を明らかにし、多様な切り口から実践的な授業プランを提案した力作で、今後の教材開発に大きな示唆を与えている。「岩見沢市中心市街地活性化事業の考察」は、市街地商店街の成り立ちと役割を歴史的に明らかにし、今日的課題である活性化事業の実態を考察した力作で、今後の地域学習教材の研究に資する所は大である。「三笠市の石炭産業とその学習」は、授業記録や副読本記述の変遷を明らかにして、地域教材としての石炭・炭鉱に新たな光をあてようとしたものだが、資料分析にはいまだしの感が否めず、今後の実践における努力を期待したい。

「自然」教育系

物 理 本年度の卒業論文は、雪氷に関わる野外観測や室内実験について、あるいは理科教育の実践に関わるテーマにより作成された。「低温室における降雪実験」（島村誠）は、低温室内において、過冷却微水滴からの人工雪作製を試みたものである。「人工雨水作成実験」（鈴木大地）は、低温室内で、過冷却水滴の粒径や供給量を変えて実験を行い、雨水の形成条件を求めたものである。「北海道石狩・空知・胆振地

方及び旭岳の積雪地域特性について」(田中圭輔)は、雪質に着目して、題目にある各地の積雪を調査し、その地域特性を考察したものである。「地盤液状化現象実験ボトル『エッキー』の動作原理とその教材化」(津田裕可)は、ペットボトルを使った地盤液状化現象シミュレータについて、ものづくり活動として製作する際のポイントを動作原理から指摘し、教材化について考察したものである。「理科教育での実験における誤差の取り扱いとその指導方法」(利波雪絵)は、教育実習から見いだされたテーマで、理科の実験に必然的な誤差の問題について、対応の方途を考察したものである。

化 学 以下の5件の卒業研究が報告された。

学部卒業

伊東 玄貴：自動滴定装置の有用性の検討

新垣 亜希：色調、温度、質量の同時測定による無機化合物の観察。

細川智亜希：伝導度測定法に関する考察

小池 秀基：リン酸カルシウムの教材化

後藤 慎次：水棲生物と窒素排出による水の汚染について

修士論文

後藤 健：自動圧力測定によるヨウ素触媒を用いる過酸化水素分解反応

生 物 (植物分野) 3名がそれぞれ体制の異なる緑藻類を培養し、成長および生活環について次のようにまとめた。「カワシオグサの培養と成長に関する基礎的研究」(小泉沙織)、「緑藻クロロゴニウムの培養と成長条件について」(澤本泰孝)、「緑藻パンドリナにおける無性および有性生活環について」(藤澤宏美)

(動物分野) 細胞死、発生、行動などの生物学の諸問題に対して、以下のような論文が提出された。「キイロシヨウジョウバエ細胞死関連遺伝子*hid*及び*mccl 2*の解析」(太田匠)、「不完全変態昆虫フタホシコオロギの鼓膜器官に関する研究」(齊藤圭一)、「カブトムシのツノの運動に関わる筋肉の解剖学的研究」(高桑健)、「キイロシヨウジョウバエの交尾行動及び雄特有筋肉を司る神経部位の解析」(中館義広)

地 学 2001年度の卒業論文は、北部北海道中川町～幌延町周辺地域の新第三系及び第四系の層序学的研究である。本研究の主要課題は、①“鮮新統”勇知層と上位の更別層の層序関係の再検討、②勇知層の地質年代と堆積環境、③調査地域周辺における勇知層と更別層の層序関係の広域的な対比である。

①については従来の見解と異なり、これらがすべて勇知層に一括されることが判明した。②に関しては、滝川・本別動物群(貝化石群)の発見や珪藻化石の分析により、勇知層の地質年代をほぼ確定することができた。また、③については、一昨年度及び昨年度の卒論との詳細な対比を行ない、これらの地層が同時異相であると推察した。

以上、野外調査データにやや不備があるが、室内作業で重要なデータが得られ、それが中川町周辺地域における勇知層と更別層の新たな見解を与えることになった。

「芸術」教育系

音 楽 本年度は、卒業演奏で取り上げる曲に関する論文が3本、「セルゲイ・ラフマニノフ ピアノソナタ第2番 変ロ短調 作品36 第1楽章についてーペダル使用による表現の追求ー」「シューマン 女と愛と生涯 作品24 について」「ドビュッシー クラリネットとピアノのための狂詩曲 第1番について」。学校現場における指導法に関する論文が4本、「小学校音楽科における合唱指導」「小学校音楽科における器楽合奏の役割と指導法」「演奏心理と歌唱指導について」「教育現場におけるジャズへの導入法とアドリブ演奏の指導法」。音楽教育の意義や授業改善に関する論文が3本、「音楽的特質を活かした教材解釈の在り方」「遊びの要素を導入した音楽科教育の改善」「自閉症児を対象とした音楽教育とその指導法」。他に「環境音の聴取における想像性と美的価値」「調律の意義と調律師の必要性について」の特色あるテーマの論文が2本あった。

美 術 絵画は油彩1名と版画2名、油彩はダリ風のシュールレアリスムの表現とダリについての論文、版画はリトグラフと線についての論文、仕掛け絵本の制作とそれについての論文。彫塑は3名、立体とオブジェによる表現と彫刻の色についての論文、手をモチーフにした制作と手の表現についての論文、ロウによるミニマル風表現とモデリングについての論文。工芸は3名、組木による家具と木の文化と伝統的家屋についての論文、照明を使った木のオブジェとフランク・ロイド・ライトについての論文、木の照明器具と工芸教育についての論文。美術教育は3名、言葉を使った美術表現についての論文とシルクスクリーンによるインスタレーション、ミニマルアートについての論文と木のロウによるミニマル的インスタレーション、日本の伝統的職人芸とその今日的可能性についての論文と仮面と照明によるオブジェ。以上12名。今年は取りかかるのが遅れた者が例年に比べて多かったとの指摘が教官の側から出された。

「生活・健康」教育系

体 育 本年度は、体育科教育、スポーツ指導の課題と学生個人の問題意識を反映した内容の卒業論文が以下に示すとおり10編提出された。「指導者がいない大学バスケットボール部員の活動状況について」(石本和寛)、「筋活動様式からみたスノーボードにおけるドリフトターンの特性について」(植村靖志)、「レーシングバイクにおけるサドル高が筋活動量ならびに呼吸循環応答に及ぼす影響」(黒川広佳)、「小学校の中間疾走フォームに関する疾走速度と疾走動作について」(佐藤京子)、「学生における精神的健康度と体育授業での意識の変化～体ほぐしの運動を通して～」(土川晴美)、「女子運動部活動における身体的暴力行為の実態とその将来的循環性」(廣田梢)、「投球における筋ストレスについて～オーバースローとサイドスローの場合～」(松本豊)、「食事と運動による減量プログラムが全身持久力に与える影響」(安永紫織)、「SPEESIONにおけるビジュアルトレーニングの効果について」(山崎稔英)、「大学生のストレス調査」(山家和枝)。

技 術 学番 8096 田中庸子
学士論文題目 Javaによる技術・家庭科教材ソフトの作成

コンピュータ用プログラム言語Javaを使用して、機械で最も重要であるカム機構を中学生に理解させるためのソフトを作成した。

学番 8112 仲本春明

学士論文題目 パソコン構造理解の為の教材製作

製作物は、中学生にパソコンのハードウェアを視覚的に理解させる為、ケースおよびデバイスの配置に工夫を凝らした。勿論ケースは、アルミ板を主体にした手作りである。

家庭科

「小学校家庭科教育における衣服管理教育の実践」は雑誌掲載の教育実践を検討し、授業案を作成した。「学生の衣生活並びに環境保全に関する行動の実態調査」は、大学生の衣生活行動と環境意識に関する調査を行い、環境教育の視点から衣生活分野の教育的課題を明らかにした。「年齢を考慮した快適な衣服の調査研究」は、前開き衣服着脱実験を行い、ユニバーサルファッションの視点から高齢者用衣服の付属留め具について考察した。「ファミリーレストランからみた家庭の食卓の展望」は、本校学生を対象にした調査結果をもとに、共食・コミュニケーションの場としての食卓について考察した。「戦後の小・中学校家庭科教科書に描かれた家庭生活の諸相」は、図表・挿絵を資料に社会の変化・要求に対応した家庭科教育について検証した。「人とモノとの関わりについての考察」は、生活および道具の歴史から人がモノに主体的に関わることの意味を探った。「江戸時代の庶民生活にみる女性観」は、絵巻物・諺絵・文学作品等から女性の労働や暮らしを概観し、人権や主体性の抛り所について考察した。「高齢社会における介護問題と教育的課題」は、男女で支える家庭福祉・社会福祉に対応した高校家庭科の教育的課題を展望した。

〈社会教育課程〉

社会教育コース・教育学グループ

北海道における自然エネルギーの利用～風力発電と雪エネルギーの利用を例に	石黒紗弥子
遺伝子組み替え食品についての考察	吉田 夏子
サッカーにおける社会的役割の一考察	
～日本のサッカーが社会にもたらす効果について	鎌田 守
自然と人間との共生についての考察～北海道エゾシカ政策を例に	後藤 貴利

社会教育コース・心理学グループ

“反腹心感”に関する研究	浅野 瑠美
非行抑止に向けた援助行動に関する一考察	高橋真理子
図上訓練と意志決定能力に関する研究	中静 一棋
いじめの対応に関する研究	
～いじめの経験が及ぼす教師としての対応への影響～	吉井 美里
欺瞞によるノンバーバル行動化	若狭 大地

地域科学コース・社会科学分野

民俗文化の記述分析における新たな視座をめざして	
～座談会の事例分析の試みから	太田 有香

社会教育コース・自然科学分野

本年度の卒業論文は、学生の希望もあり、テーマが多岐にわたるものであったが、多方面からの支援により作成されたものである。「食品添加物の問題点と消費者の関わりについて」(大木 蘭)は、日常的な食料品に含まれる食品添加物の内容や問題点について、あるいは添加物の歴史的な経緯などについて調査・検討を行ったものである。「祭りと踊り文化の形成について」(川崎友絵)は、舞いと踊りの発祥及びその変遷をたどり、文化としての形成過程を整理し、よさこいソーラン祭りを例に現在の踊りを考察している。「雪結晶の対称性に関する研究」(丸藤貴弘)は、板状雪結晶の対称性について、コンピュータの画像処理によりそれを数値的に示した。「緑茶産業の維持と発展について」(橋本栄松)は、我が国の緑茶産業の推移及び現在の社会における緑茶などの普及とその問題について検討を行っている。「燃料電池の研究」(濱中亮介)は、燃料電池の開発及び利用について、化石燃料に関わる諸問題に関連づけて調査したものである。「リサイクルの現状と改善点」(渡邊靖洋)は、リサイクルに関する新たな法律の制定や現在のリサイクルの進め方などについて調査している。

社会教育コース・スポーツコミュニケーション分野

今年度は、体育科教育、スポーツ指導の課題と学生個人の問題意識を反映した内容の卒業論文が以下に示す通り10編提出された。「冒険教育が対面的なコミュニケーションに与える影響に関する一考察～中学校を対象としたイベント型プログラムにおける調査結果より」(谷崎誠)、「走り幅跳びにおける踏み切り準備動作の一考察～低・中位記録者の場合～」(田中勇心)、「異なる目標設定から生じる怠惰の比較について」(門伝智昭)、「大学運動選手のストレッサーについて」(福山雅美)、「北海道学生サッカーリーグに所属するサッカー選手のサッカー動機と心理的競技能力に関する調査」(川高亮介)、「食事と運動による減量プログラムが全身持久力に与える影響」(三田地貴子)、「バスケットボールのルール改正がゲームに及ぼす影響に関する研究」(阿部彩佳)、「卓球のボールサイズ変更が競技者に及ぼす影響について」(小浜典子)、「スキーの指導者養成の現状把握とあり方について～全日本スキー連盟公認基礎スキー準指導員受験者に焦点を当てて」(山城純)、「学校給食における中学校の意識に関する一考察」(伊藤裕子)。